

## 遠藤三郎と「満洲国」

—— 関東軍作戦主任参謀から参謀副長へ ——

報告者：吉田曠二

### (1) 遠藤三郎とはどのような軍人であったのか？

その生涯： (遠藤の年譜をご参照ください)

その性格： やさしい少年がなぜ軍人の道を選んだのか？

その道の背景には経済的な理由があった。

東北地方の貧しさ。不況の影響。

その成績： 仙台幼年学校から学業成績は常に一番、とくに数学が得意、フランス語を専攻、この二つが彼の人生を決める。フランス駐在武官(約4年間)その間に第一次大戦の教訓を学ぶ。毒ガス兵器の講義を聴く。石井四郎との出会い。陸軍大学の講義ノート(これは現在まだ未発見)このころの個人日記は現存する。

### (2) 「満洲事変」から「満洲国」時代の遠藤三郎

その序幕(第一期) 1931年9月～11月

中央参謀本部作戦課員の時代：橋本ミッションの随員として渡満。

当時の奉天の関東軍臨時司令部に事件不拡大のための止め男として派遣。

その間、関東軍の動きを記録した日誌「満洲事変中渡満日誌」を書き残す。

関東軍の陰謀、満洲国の実態を記録する。石原莞爾の独断による錦州爆撃、

本庄軍司令官の考え：北満出兵と天津暴動による溥儀擁立、三宅参謀長も

北満出兵の口述を求めて画策する姿が記録されている。

満洲国建国以後(第二期) 1932年8月～1935年8月

関東軍作戦主任参謀の時代：1932年9月15日、「日満議定書」調印式に参列、

同年の秋から、熱河進攻作戦の立案、関東軍による純粹の作戦案を立案。

実際は国際社会を欺くための、日満共同出兵となる。5月タンクー停戦協定

に参加。

1933年9月から中央参謀本部の要請を受けて北満地下要塞の建設計画に当たる。石原莞爾の仕事を受け継ぎ、第731部隊の細菌兵器開発にも指導的な役目(開発予算の管理配分など)を担当する。

この時代、遠藤がファイルに保存した記録：「対満要綱」：これは満洲国のトップレベルの機密資料である。戦後も遠藤の自宅に所蔵していた。

例：「極秘・在満機関統一系統図」昭和9年7月18日 関東軍司令部作成」等  
この一枚の極秘資料をどう読み取るか？

①溥儀不在の満洲国②満洲国の頂点には天皇が君臨している。③その配下に関東軍司令官が全満洲の国家機関を統治する。その現実が浮きあがってみえる。この資料から、満洲国は大陸版の第二大日本帝国であったとみることができよう。

軍事面での遠藤の活動：北満永久地下要塞の構築計画と第731部隊の細菌兵器開発の管理。その活動が日記に記録されている。(参考資料：関東軍地下要塞分布図)  
この一連の経験をもつ遠藤は1935年秋に帰国し、陸軍大学教官{教授}に就任する。

翌年1936年春から初夏にかけて、遠藤は陸軍大学で対ソ作戦について極秘の講義をした。その講義録が二種類現存する。昭和11年度第三学年「戦術講授録」(防御及退却)と昭和11年度第三学年「校内戦術講授録」である。

この二つの講義録は1937年の対ソ戦を予測した具体的な作戦計画になっている。その特色は前者では、もしもソ連軍が大挙して北満の国境を越えて満洲国の領域内に侵攻を開始したときの防御戦術、後者が北満の永久地下要塞を拠点とする関東軍の対ソ侵攻作戦である。なお後者では遠藤は奇襲による対ソ総力戦を骨子に作戦案を作成し、シミュレーションしている。

この二つの作戦案を読み解くと、遠藤はその得意の数学を活用した知将であったことがわかる。彼は安易な国境紛争を否認し、やるなら全面的な総力戦を検討していた。その構想の基本には、孫子の兵法に学んで、「兵は国の大事(宝)」であり、国境紛争などでみだりに兵を使用することなどしてはいけないと警告を発している。

遠藤は対ソ全面戦争で日本軍が有利に戦えるのは、1937年1月に開戦後、二週間から20日以内と予測していた。なお、遠藤は1939年9月、今度は関東軍参謀副長として、再び満洲に派遣される。

ノモンハン事変以後(第三期)1939年9月初旬～翌年3月

遠藤は1939年9月初旬、関東軍が敗北したノモンハンの戦場に派遣された。彼は停戦協定を現地で締結するために、天皇の命令を関東軍司令部と現地部隊に伝達した。しかしその後の遠藤はさらなる対ソ戦を画策する関東軍上層部と富永中央参謀本部作戦部長らの横やりで、「対ソ恐怖症」のレッテルを貼られて孤立し、翌年春、関東軍参謀副長のポストから左遷された。彼はこの段階で、対ソ作戦の不可を説いた建白書を四通作成している。それを読むと、遠藤は、今は日中戦争の最中であり、その決着がつかない段階で、北方の大国ソ連と闘うことの無謀さを力説している。

しかしその孤立状態のなかで、彼は1939年12月10日、こっそりと第七三一部隊を訪問して、石井四郎に面談し、細菌兵器を実践に使用できるか？その可否を確かめている。その時、石井部隊長は遠藤に、まだ細菌兵器の使用は「防御法の研究が未完成である」ことを説明している。遠藤もそれに「同意」したとその日記に記入

しているが、この石井との会見で、もしも細菌兵器が実戦使用できるという確約を得ていたら、遠藤がどのような判断をしたか？大変興味深い謎を残している。

しかし結論を見れば、この年の12月、関東軍司令部で遠藤が提案した対ソ作戦のシミュレーション（兵棋演習）で、関東軍が極東ソ連軍に敗北し、ノモンハン事変の再発は中止になった。遠藤は自分のポストをかけて、再度の対ソ作戦の発動をしても勝利は不可能であることを実証した。その結果、皮肉にも彼は自分が左遷される悲哀を味わった。

結語：

関東軍作戦参謀時代の遠藤の行動やその残された資料などから、関東軍の体質を総合的に判断すると、関東軍の謀略とその無謀さ、好戦欲、猪突猛進性を垣間見ることができる。その軍事組織の中で遠藤は冷静に情勢を判断して、1939年段階では、もはやソ連軍との国境紛争では、日本軍の勝利が不可能であることを認識し主張した。しかし関東軍では、その教訓が生かされることはなかった。

遠藤が大事にした「兵は国の大事（宝）」という思想、この人間性重視の思想も、その後、陸軍では大事に尊重されることなく、1941年12月には太平洋戦争へと拡大された。戦後、遠藤はこの流れの中で体験した教訓から、武力行使の無意味さを自覚して、非戦論に傾斜していくことになる。戦争は人間を変えてしまう。この反省は遠藤の戦後の平和活動の出発点となる。しかし満洲国については、自分は連邦制にしたいと考えたなど、その国家の欺瞞性を即時、反省することが出来なかった。

満洲国にはノスタルジアがあったのか？東京裁判でも熱河作戦の立案は満洲国の国内問題であったとして、一時、自分の責任を回避しようとする文書を書いている。

遠藤がああ戦争の責任を全面的に認めて、認罪するには、数年の年月が必要であった。そのプロセスは1946年に巣鴨に入獄してから、1955（昭和30）年に新中国を訪問するなどの自己反省の期間が介在している。その間に、彼が思想を変革できたのは、獄中の読書や昭和30年の新中国訪問が一つの転機になったものとする。その後、戦争行為が犯罪であったことを認罪した彼は二度とその思想を逆行させることなく、非戦平和＝軍備亡国の思想を展開し、その姿勢を論客として晩年まで貫徹した。

晩年の遠藤はガンジーとトルストイ流の非戦論者であった。遠藤は再軍備論者からその思想を一夜にして豹変したと、論争を挑みかけられたが、その思想の変革は豹変ではなく、若き時代のやさしい性格と厳しい戦争体験と戦後の反省が土台になって、完全な非戦論者に自己変革したといえるであろう。

以上

吉田曠二(日中近現代史研究者)著

# 元陸軍中將 遠藤三郎の肖像

——戦略・戦術の立案者から非戦平和運動の闘士へ——

A5判各巻 448頁(予定) 上製 全二巻 各巻予価(本体 8,000円+税)

十五年戦争に関東軍作戦主任参謀や大本営幕僚としてかかわり指導した元陸軍中將遠藤三郎は、なぜ戦後、日本国憲法第九条の理念に共鳴し、非戦平和運動や新中国との国交回復運動を、元軍人たちを組織し展開したのか？

未公開の詳細な、80年にわたり書き継がれた「遠藤三郎日記」と本人の手元に残された旧関東軍の極秘資料や遠藤自身の手になる意見書、講授録(対ソ作戦案)、建白書等を博搜し、エリート軍人の、世界の完全軍縮構想にまで広がる、ドラスティックな思想転換の軌跡を明らかにする。



参謀本部作戦課勤務時代の遠藤三郎(30歳)

「満洲事変」(九・一八事変)八十年 日中友好元軍人の会(会誌「8・15」)創立五十年

日本近現代史・軍事史・日中関係史研究に不可欠の書！

主な内容(タイトル・内容構成等は一部変わることがあります)

### 上巻 フランス留学から日中戦争へ

#### 第I部 若き遠藤三郎

- 第1章 学習時代と関東大震災の体験
- 第2章 フランス留学とロマンス
- 第3章 満洲事変へのプレリュード

#### 第II部 満洲事変の勃発

- 第1章 「満洲事変中渡満日誌」にみる関東軍の秘密
- 第2章 関東軍の戦略爆撃と「北満」出兵
- 第3章 戦火さらに上海へ
- 第4章 七了口上陸作戦の立案
- 第5章 上海事変
- 第6章 関東軍作戦主任参謀として「満洲国」に赴任
- 第7章 「日満議定書」の調印と密約協定
- 第8章 熱河省経略計画
- 第9章 関東軍の対ソ作戦
- 第10章 二・二六事件とその後遺症
- 第11章 遠藤三郎の対ソ戦術論

#### 第III部 日中全面戦争

- 第1章 近衛内閣と蒋介石・毛沢東の戦略
- 第2章 部隊長としての遠藤三郎
- 第3章 ノモンハン事変
- 第4章 第三飛行団と重慶無差別爆撃

#### 巻末付録

「満洲事変中渡満日誌」(昭和6年9月24日～11月3日)

### 下巻 アジア太平洋戦争から戦後へ

#### 第I部 対米・英・蘭世界戦争と遠藤三郎

- 第1章 第三飛行団とマレー・シンガポール作戦
- 第2章 マレー・シンガポールからパレンバン作戦へ
- 第3章 シンガポール上陸作戦
- 第4章 ジャワ侵攻作戦

#### 第5章 凱旋將軍の帰還とドーリットルの東京空襲

#### 第II部 遠藤三郎の航空決戦思想と日本の敗戦

- 第1章 航空決戦の渦中に立つ
- 第2章 軍需省航空兵器総局長官として
- 第3章 絶対国防圏＝サイパン島の決戦
- 第4章 台湾沖航空決戦と神風特別攻撃隊
- 第5章 硫黄島決戦から沖縄決戦
- 第6章 大本営の本土決戦案に反対した遠藤三郎
- 第7章 断末魔の「神国日本」と遠藤三郎

#### 第III部 「神国日本」の崩壊と新生日本の道

- 第1章 非武装平和の日本へ
- 第2章 戦争責任の追及と巢鴨入獄
- 第3章 日誌「巢鴨在所時代」にみる遠藤三郎
- 第4章 出獄後の生活、国連警察部隊の設置を提唱
- 第5章 戦後の平和運動と最初の中国旅行
- 第6章 参院選出馬と日中国交回復運動
- 第7章 護憲と再軍備反対の論客として

#### 著者紹介 吉田曠二(よしだ・ひろじ)

1937年4月15日、京都市に生まれる。1963年同志社大学大学院法学研究科修了(法学修士)。

1964年朝日新聞大阪本社入社、広告局で広告市場調査と広告審査など担当。その間に大学院時代の恩師田畑忍先生に師事し、日本近現代史研究を継続。「加藤弘之の研究」「魯迅の友・内山完造の肖像」「ドキュメント日中戦争」などを執筆刊行。

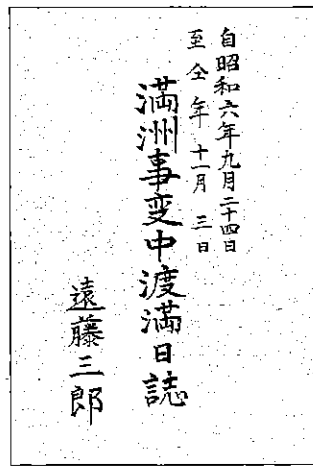
1997年朝日新聞社を定年退職後、名城大学法学部非常勤講師となり外交史・政治史の講義を担当、2006年から同大学院で、政治理論・政治史を講義。

(株)すずさわ書店

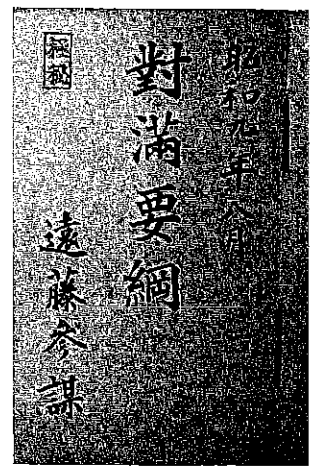
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-18-15 第2中村ビル  
Tel. 03-5386-3969 Fax. 03-5337-4758

本書で使用した主な資料(右図版を含む)

- 「遠藤三郎日記」(1904～1984)
- 「陸軍大学・第三学年講授録」(防禦及退却、遭遇戦及追撃)(1936)
- 「遠藤部隊従軍報告書」(1937)
- 「極秘 関東軍指導要綱」(1939)
- 「極秘対ソ作戦構想」沢田茂宛書簡(1939)
- 「奥地侵攻作戦二関スル意見」(1940)
- 「航空戦略構想各種建白書」(1943～44)
- 「サイパン玉砕後の戦争指導についての建白・意見書の草稿」(1944)
- 日誌「巢鴨在所時代」(1947～48)
- 日本国憲法第九条を守る運動関係各種小冊子(1950～)
- 毛沢東・周恩来との対談記(1955)
- 「元軍人の見たる新中国」(1956)
- 非戦平和運動関係各種パンフレット・書簡・平和思想論争の口述筆記(1950～1979)
- 「8・15」(日中友好元軍人の会機関誌)(1961～)
- 自叙伝「日中十五年戦争と私」(1974)



●「満洲事変中渡満日記」(1931)



●「対満要綱」(1934)

### 遠藤三郎略年譜

1893(明治26)年	1月2日、山形県東置賜郡に生まれる。		
1904(同37)年	11歳 8月1日、「日記」を書き始める。		
1907(同40)年	14歳 9月、仙台陸軍幼年学校入学。		
1910(同43)年	17歳 9月、中央幼年学校に移る。		
1912(同45 大正1)年	19歳 5月、同校卒業(恩賜)12月、陸軍士官学校入学。		
1914(同3)年	21歳 5月、陸軍士官学校(26期)卒(恩賜)重砲兵第一連隊付、12月、砲兵少尉。		
1915(同4)年	陸軍砲工学校(2年間)		
1919(同8)年	26歳 8月、陸軍大学校入学(3年間)		
1922(同11)年	陸軍大学校(34期)卒業		
1923(同12)年	30歳 3月、野重砲第一連隊中隊長。9月、関東大震災の戒厳令下で、朝鮮人約6000人を保護。12月、参謀本部作戦課に配属。		
1925(同14)年	32歳 9月、作戦計画上奏。		
1926(同15 昭和1)年	33歳 9月、フランス駐在武官として仏国に出発。パリからルーアンに移る。		
1927(同2)年	34歳 6月、メッツ防空学校(半年間)フランス陸軍大学校(約2年間)		
1929(同4)年	36歳 12月、アメリカ経由で帰国 参謀本部作戦課配属。		
1931(同6)年	38歳 9月、満洲事変勃発。橋本ミッシェンの一員として満洲に渡る。「満洲事変中渡満日記」を記述。	1942(同17)年	49歳 2月、第三飛行団長としてシンガポール作戦を援護、3月、パレンバン奇襲、ジャワ攻略作戦を指揮し戦果をあげる。4月、陸軍航空士官学校幹事、12月、同校長、中将。
1932(同7)年	39歳 1月、第一次上海事変勃発。七了口上陸作戦案を起案。上海に派遣される。8月、関東軍作戦主任参謀。奉天に派遣される。	1943(同18)年	50歳 陸軍航空本部・航空総監部の総務課長。11月、航空兵器総局長官(兼務大本営幕僚)。
1933(同8)年	40歳 2月、熱河省進攻作戦を立案。5月、タンクー停戦協定締結に随員として参加。8月、砲兵中佐。9月～ソ満国境地帯の地下要塞の築城を指導。ハルビンの第731部隊(細菌戦実験)の運営にも協力。	1944(同19)年	51歳 サイパン島決戦に前後し、対米航空戦略を大本営に建言。戦闘機中心のゲリラ戦法を力説。
1934(同9)年	41歳 8月、陸軍大学校教官、1936年春に対ソ侵攻作戦案などを極秘で講義。	1945(同20)年	52歳 4月、沖繩決戦を天王山とし、本土決戦を不可とする意見を鈴木首相に建言。採用されず。敵は大本営にあり、とみる。8月15日、敗戦。戦後日本の生きる道を模索。武備のない徳の国、新日本の建設を主張。
1936(同11)年	43歳 2月、2・26事件、反乱軍の説得に当たる。8月、野戦重砲兵第5連隊長(九州小倉)	1946(同21)年	53歳 3月、埼玉県入間川町に入植。開墾をはじめる。
1937(同12)年	44歳 7月、盧溝橋事件発生。8月、北支に派遣。12月、参謀本部第一課長(教育)兼陸軍大学教官。	1947(同22)年	54歳 2月、戦犯容疑で巣鴨拘留所に入る。(1年間)獄中、英語を学習。読書に専念。
1939(同14)年	46歳 8月、陸軍少将、9月、関東軍参謀副長、ノモンハン事件処理のため、現地に派遣される。ノモンハン停戦指導。対ソ戦の無謀を力説。その結果孤立。	1953(同28)年	60歳 2月、追放解除。憲法擁護国民連合発足。同代表委員、世界連邦建設同盟参加。
1940(同15)年	47歳 3月、対ソ恐怖症の烙印を押されて帰国。浜松飛行学校付。8月、第三飛行団長(漢口へ)	1955(同30)年	62歳 戦後初めて中国を訪問。北京で毛沢東国家主席、周恩来首相と会見。
1941(同16)年	48歳 春から重慶爆撃を指導。その無謀を上司に	1956(同31)年	63歳 8月、元軍人団を率いて訪中。
		1957(同32)年	64歳 7月、第二次元軍人団訪中。
		1959(同34)年	66歳 参議院選挙に出馬、憲法第9条擁護を旗印に護憲活動を目指すも、落選。
		1960(同35)年	67歳 日米安全保障条約改定に反対、護憲運動に専念。11月、第4回目の訪中。日中国交回復に尽力。
		1961(昭和36)年	68歳 8月、東京で日中友好元軍人の会を創設。機関誌「8・15」を創刊。護憲平和の論客となる。護憲と非武装・日中友好の論陣をはる。
		1972(同47)年	79歳 6月、第5回目の訪中。北京の人民大会堂で周恩来首相と会談。最後の訪中となる。
		1974(同49)年	81歳 11月、自叙伝「日中15年戦争と私」を刊行。自分も指導した戦争を「認罪」しその思想の変革を陳述。
		1979(同54)年	86歳 4月、自宅に押しつけて来た元軍人仲間と論争。元軍人仲間の反共・ソ連脅威論(自衛隊の軍備削減論)に対決し、理論で相手を屈伏させる。
		1984(同59)年	91歳 9月9日、「日記」を終了。11月11日、91歳の生涯を閉じた。

予約・注文書

吉田曠二著 元陸軍中将 遠藤三郎の肖像 上巻

冊

予価(本体8,000円+税) ISBN978-4-7954-0280-5

吉田曠二著 元陸軍中将 遠藤三郎の肖像 下巻

冊

予価(本体8,000円+税) ISBN978-4-7954-0281-2

すずさわ書店 東京都新宿区高田馬場4-18-15 第2中村ビル TEL03-5386-3969